

日本学術会議

東北地区会議ニュース

No. 39

1 ごあいさつ

日本学術会議第二部会員 東北地区会議第26期運営協議会 代表幹事

国立大学法人東北大学 大学院医学系研究科 教授

五十嵐 和彦

いつも日本学術会議東北地区会議の活動にご尽力を賜り、あつくお礼申し上げます。第26期東北地区運営協議会代表幹事を務めております五十嵐です。よろしくお願い申し上げます。

東北地区会議では学術研究の諸領域で活動されている専門家による成果を市民の皆様と共有し、学術研究に対する社会の期待と支援をひろげていくことなどを目指し、東北の各県で多彩なテーマで公開学術講演会を開催しております。今年度は2024年11月30日に「東北地方の持続可能な食料生産のこれから～畜産業、水産業」と題して東北大学片平キャンパスにてオンラインもあわせて開催いたしました。地域の産業界からの活動状況や課題のご報告も頂きながら、食料を巡る複雑な課題を俯瞰し、現場と学術の立場を越えて討論する素晴らしい機会になりました。ヒトの健康にとって動物性タンパク質の重要性は異論のないところですが、それを供給する地域の畜産業と水産業の現場で、アカデミアの活動が組み合わさりながら魅力をさらにあげつつ発展していく動きに、大いに期待が高まりました。オーガナイザーの木村直子先生(山形大学)、講師を務めて頂きました皆様、特に産業界から課題や取り組みなどの紹介を頂きました高橋勝幸様(株式会社蔵王ファーム)、土合和樹様(株式会社フィッシャーマン・ジャパン・マーケティング)、そして参加者の皆様にあらためて感謝を申し上げます。なお、講演会の模様は日本学術会議東北地区会議ホームページにてオンデマンド配信も行われました。

学術講演会にあわせて、当日午前「科学者との懇談会」を開催いたしました。日比谷潤子副会長をはじめ会員・連携会員11名、東北地区の大学教員9名にご参加頂き、「変化する地方の大学の在り方と取り組み」をテーマに、大学の情報科学系学部の現状と課題、大学のDX化、ダイバーシティ推進の3つの観点から、それぞれ事例紹介と意見交換を行いました。東北地方をはじめとして全国各地で人口減少が社会インフラに様々な影響を及ぼしつつあります。そのなかで大学が地域情報基盤として果たしていく役割をご指摘頂きました。デジタル障壁の問題も、大学のノウハウを使いつつ地域の中で解決していくことで、地域の健全な発展に大いに資することと思われました。大学自体の持続性についても活発な意見交換が行われ、女性教員の離職率の高さという問題、教員間のつながりをつくることの重要性なども討論されました。各大学が運営する保育所について、相互利用を広げて他大学からの出張者も利用可能にするという具体的なアイデアも紹介頂きました。これは省庁関係では先例があるとのことですので、ぜひ広がることを期待したいところです。

大学内外に多くの重要な問題が山積していますが、それに正面から取り組むことも学術の使命と言えます。東北地方の活動から多くのヒントが出てくることに期待が高まった一日でした。2025年度の公開シンポジウムは北川尚美先生(東北大学)をオーガナイザーとして、第三部夏季部会と合わせて開催すべく企画が進んでいます。ぜひご参加を頂ければ幸いです。

2 科学者との懇談会及び公開学術講演会 開催報告

2024年11月30日（土）に現地及びオンラインのハイブリッド開催で科学者との懇談会及び公開学術講演会が開催されました。午前に開催された科学者との懇談会では「変化する地方の大学の在り方と取り組み」をテーマとし、東北地域で活躍する大学研究者と日本学術会議日比谷潤子副会長をはじめ日本学術会議東北地区会議運営協議会委員とで、データサイエンスや情報科学教育の現状、大学の教育・研究におけるDX化の推進状況、ダイバーシティの推進状況などを、話題提供を頂きながら懇談を行いました。現場からの率直な意見を基に、今後取り組んでいくべき課題や対応策等について、有意義な意見交換が行われました。



科学者との懇談会の様子

午後からは、「東北地方の持続可能な食料生産のこれから～畜産業、水産業」をテーマとし、公開学術講演会が開催されました。東北地区会議会員であり山形大学教授の木村直子先生の司会のもと、日本学術会議日比谷潤子副会長の開会挨拶を皮切りに、6名の講演者より、自然と食料資源に恵まれ、日本の食料安定供給を支える東北地方において、主として動物性タンパク源を供給する畜産業と水産業に焦点をあて、現状と課題、産業を支える学術研究、地域特性を生かして展開する企業の取組などを紹介し、気候変動や世界情勢に対し、盤石な東北地方の持続可能な食料生産の在り方などについて、講演が行われました。



日本学術会議副会長
日比谷潤子先生

東北地区会議代表幹事
五十嵐和彦先生



大阪国際大学
真鍋昇先生



山形大学
市浦茂先生



株式会社蔵王ファーム
高橋勝幸氏



東北大学
大越和加先生



宮城大学
西川正純先生



株式会社フィッシャーマン・
ジャパン・マーケティング
土合和樹氏

畜産業の現場からは、大阪国際大学学長補佐／人間科学部 教授の眞鍋昇先生が「地球規模の人口爆増・食料危機における畜産の必要性和役割」を題目に、山形大学アグリフードシステム先端研究センター助教の市浦茂先生が「人工知能を活用した畜産現場における飼養管理技術の開発」を題目に、株式会社蔵王ファーム代表取締役の高橋勝幸氏が「蔵王和牛 私たちが信じる「本当のおいしい」を鮮度そのままに届けるために ―高橋畜産グループの挑戦―」を題目に、水産業の現場からは、日本学術会議第二部会員・東北大学 大学院農学研究科教授の大越和加先生が「変化が続く水産業の現状と課題」を題目に、日本学術会

議第二部会員・宮城大学 理事／副学長／食産業学群教授の西川正純先生が「ブルーカーボンを取り巻く持続可能なサーキュラーエコノミーの実現に向けて ～磯焼けウニの利活用を目指して！～」を題目に、株式会社フィッシャーマン・ジャパン・マーケティング取締役 COO の土合和樹氏が「持続可能な水産資源の維持確保に向けていま取り組みたいこと」を題目に、それぞれ講演を行いました。

講演終了後は、日本学術会議第三部会員・東北大学大学院工学研究科研究科長補佐／教授の北川尚美先生をファシリテーター、講演者 6 名をパネリストとして総合討論が行われ、今後の課題等について理解を深める有意義な機会となりました。



公開学術講演会での総合討論の様子

日 時

科学者との懇談会：2024年11月30日（土）10：15～12：00

公開学術講演会：2024年11月30日（土）13：30～16：35

開催方式

現地開催及びオンラインによるハイブリッド開催

テーマ

科学者との懇談会：変化する地方の大学の在り方と取り組み

公開学術講演会：東北地方の持続可能な食料生産のこれから～畜産業、水産業

講演会次第

13：30 開会挨拶

日本学術会議副会長挨拶

日比谷 潤子（第26期日本学術会議副会長、学校法人聖心女子学院常務理事、
国際基督教大学名誉教授）

13：40 講演

I 「地球規模の人口爆増・食料危機における畜産の必要性和役割」

眞鍋 昇（大阪国際大学 学長補佐／人間科学部 教授）

II 「人工知能を活用した畜産現場における飼養管理技術の開発」

市浦 茂（山形大学 アグリフードシステム先端研究センター 助教）

Ⅲ)「蔵王和牛 私たちが信じる「本当のおいしい」を鮮度そのままに届けるために
—高橋畜産グループの挑戦—」

高橋 勝幸 (株式会社蔵王ファーム 代表取締役)

Ⅳ)「変化が続く水産業の現状と課題」

大越 和加 (日本学術会議第二部会員、東北大学 大学院農学研究科 教授)

Ⅴ)「ブルーカーボンを取り巻く持続可能なサーキュラーエコノミーの実現に向けて
～磯焼けウニの利活用を目指して!～」

西川 正純 (日本学術会議第二部会員、宮城大学 理事/副学長/食産業学群 教授)

Ⅵ)「持続可能な水産資源の維持確保に向けていま取り組みたいこと」

土合 和樹 (株式会社フィッシャーマン・ジャパン・マーケティング 取締役 COO)

16:15 総合討論

ファシリテーター:

北川 尚美 (日本学術会議第三部会員、東北大学大学院工学研究科研究科長補佐/教授)

パネリスト:

眞鍋 昇 (大阪国際大学学長補佐/人間科学部 教授)

市浦 茂 (山形大学アグリフードシステム先端研究センター 助教)

高橋 勝幸 (株式会社蔵王ファーム 代表取締役)

大越 和加 (日本学術会議第二部会員、東北大学大学院農学研究科 教授)

西川 正純 (日本学術会議第二部会員、宮城大学 理事/副学長/食産業学群 教授)

土合 和樹 (株式会社フィッシャーマン・ジャパン・マーケティング 取締役 COO)

16:30 閉会挨拶

五十嵐 和彦 (日本学術会議第二部会員、日本学術会議東北地区会議代表幹事、
東北大学大学院医学系研究科教授)

司会進行

木村 直子 (日本学術会議第二部会員、山形大学大学院農学研究科教授)

講演会参加者

約200名

(うち、オンライン約160名)



公開学術講演会の様子



科学者との懇談会・公開学術講演会を振り返って

科学者との懇談会に参加して

日本学術会議第三部会員

学校法人青森山田学園 青森大学ソフトウェア情報学部教授

下條 真司

本懇談会では、「変化する地方の大学の在り方と取り組み」をテーマに、地方大学の課題、AI と教育、大学の DX、ダイバーシティ推進について議論しました。筆者は地方大学の現状を「危機」と捉えており、対策を急がなければ地方は衰退し、取り返しのつかない状況に陥ると危惧しています。

すなわち、地方では人口減少と産業衰退が深刻化し、情報格差も広がっています。都市部に教員が集中する中、地方大学では特に情報系教員が不足し、文科省の DX 推進も効果が限定的です。また、AI の進展により、従来の教育方法では対応できなくなりますが、地方大学には AI を前提とした教育への転換を担う人材や資源が不足しています。この状況では、AI が教育格差をさらに拡大する可能性さえあります。

その一方で、大学の DX 推進では、オンライン授業により学習効果の二極化が進行しており、さらに踏み込んだラーニングアナリティクスなどを用いて学生の学習状況を把握し改善する仕組みが重要です。さらに、学生が匿名で意見を述べられる環境整備の必要性が指摘されました。

厳しい環境の中、人材獲得がますます重要になる中で、ダイバーシティ推進では、女性教員の採用促進や柔軟な雇用形態の整備、単身赴任手当などの経済的支援が求められています。また、待機児童ゼロの良好な子育て環境を活かし、地方の魅力をアピールする可能性も議論されました。地方大学は地域社会の重要な拠点であり、教育基盤の強化が急務です。地域の大学が協力しながら、地域自治体、産業界とさらに連携した取り組みが必要であると思います。

(本稿は、会議録音より、notebookLM にまとめてもらったものを推敲しました。)



下條真司先生

科学者との懇談会に参加して

国立大学法人東北大学大学院医工学研究科教授

田中 真美

2024 年 11 月 30 日、日本学術会議副会長の日比谷潤子先生をお迎えし、科学者との懇談会が東北大学片平キャンパスにて、オンラインと対面のハイブリッド形式で開催されました。本懇談会では、「変化する地方の大学の在り方と取り組み」をテーマに、「大学の情報科学系学部の現状と課題」、「大学の教育・研究における DX 化の推進状況」、「ダイバーシティ推進の現状」の 3 つの話題が取り上げられました。「ダイバーシティ推進の現状」では、2024 年に一般社団法人国立大学協会 教育・研究委員会 男女共同参



田中真美先生

画小委員会が発表した「第 20 回追跡調査報告書」を基に私から東北地区の国立大学における取り組みや課題、さらに東北大学の取り組みについて報告しました。東北地区の大学が DEI 推進に積極的に取り組んでいる現状や、理工系における女性教員の採用や定着の困難さ、さらにそれらの課題を解決するための方策について懇談を通して学ぶ機会となりました。また、東北地区では待機児童がほぼゼロであることから、こうした点をより積極的にアピールすべきだとのコメントもあり、有益な意見を得ることができました。東北大学における取り組みについては、制度をうまく活用できている人達がいる一方で、学内の周知が十分機能していない部分も指摘されました。これにより、情報の伝達の難しさや、支援を必要とする方への寄り添い方についても考える機会となり、今後の対策に活かしたいと考えています。東北地区は面積が広く各大学が離れており、さらに中央との格差の問題もありますが、大学間の連携をより強化することによって、問題解決やさらなる発展につながるだろうという意見が、3 つの話題を通じて共通して見られ、今後の東北地区の大学の在り方を考える上で重要な視点であると感じました。

科学者との懇談会に参加して

国立大学法人岩手大学 情報基盤センター 准教授

川村 暁

「変化する地方の大学の在り方と取り組み」というテーマで、ハイブリッド形式で懇談会が開催された。話題は、①大学の情報科学系学部の現状と課題、②大学の教育・研究における DX 化の推進状況、③ダイバーシティ推進の現状、であった。私は情報系の教員なので、話題①と②に関連することについて記したい。

情報教育や DX に関係することとして、地方大学から都市部の大学への教員の流出に苦しんでいること、特に情報系の教員採用が非常に困難であること（募集しても応募がない）が話題となった。他方、高校「情報 1」の必修化、文部科学省数理・データサイエンス・AI（DSAI）教育プログラムへの対応、DSAI や DX の推進などもある。前述の課題もあり、地方の大学でこれらに十全に対応出来るか？と考えると、困難な状況にある地方大学の悩みは深い。

教育の DX については、動画コンテンツなどを取り入れた講義で、教材が活用されるかは学生の学習意欲に左右されるという話題があった。教材を視聴するかしないかは学生次第であるためである。また、生成 AI の急速な発展により、生成 AI を前提とした教育への転換が必要となっていることが話題となった。ハルシネーションもあることから生成 AI を使いこなすのは難しいが、かといって使わせない（使うな）ということも出来ないだろう。生成 AI を学生が使ってくることを前提に、講義や教授法を検討する必要があるのではないかという指摘もあった。

懇談会の参加を通じ、広く意見交換することができたことに、心より感謝申し上げます。



オンライン参加の川村暁先生（右下）

日本学術会議東北地区会議公開学術講演会「東北地方の持続可能な食料生産のこれから～畜産業、水産業」を開催して

日本学術会議第二部会員

山形大学大学院農学研究科動物機能調節学分野教授

木村 直子

本講演会は2024年11月30日(土)に、東北大学片平キャンパスにて、オンライン併用で開催し、当日200名超の参加者のほか、約150名のオンデマンド視聴を賜りました。

テーマ企画の経緯は、世界人口の増加により食料需要が増す中、気候変動や地政学的リスクにより、世界の食料生産・供給が不安定化しています。一方、長期デフレの影響により食料や農業生産資材を容易に輸入しにくくなりつつある日本では、国内農業従事者の減少・高齢化により、将来の食料生産力が懸念されています。これらを背景に、2024年6月に、食料・農業・農村基本法が25年ぶりに見直され、食料安全保障の確保や、環境と調和のとれた持続可能な食料生産システムの構築が強化されました。水産業では、2018年に70年ぶりに漁業法が改正され、2022年に水産基本法の理念である「水産基本計画」が新たに閣議決定されています。これらをきっかけに、一般消費者の皆様に、我が国の食料需給の現状、我が国の食料基地としての東北地方のポテンシャルを知って頂き、「国産の質の高い食料品を、手頃な価格で入手し続けるために、消費者はどのように向き合えばよいのか」などについて、考える機会になればと考えました。



木村直子先生

今回は、動物性タンパク源を供給する畜産業と水産業に焦点をあて、畜産領域から、眞鍋昇先生(大阪国際大学学長補佐教授)、市浦茂先生(山形大学アグリフードシステム先端研究センター助教)、高橋勝幸様(株式会社蔵王ファーム代表取締役)、水産領域から、大越和加先生(日本学術会議第二部会員、東北大学大学院農学研究科教授)、西川正純先生(日本学術会議第二部会員、宮城大学理事/副学長/食産業学群教授)、土合和樹様(株式会社フィッシャーマン・ジャパン・マーケティング取締役COO)にご登壇を賜り、各産業の現状と課題、産業を支える学術研究、地域特性を生かした企業の取組などを概説して頂きました。総合討論では、「持続的食料生産のために、消費者ができること」、「適正な農畜水産物の価格の合意形成をどのように進めたらよいか」などについて、それぞれの立場で率直な意見交換が行われました。

今回、東北地方の大学生に多数参加して頂きました。各産業の現状や最新技術の概説は興味深かった、生産者の生の声や思いを聴いて、可能な限り国産の食料品の消費を買い支えたいと思ったなど多くの感想が寄せられました。我が国では、1990年代後半から現在までの30年間余り、食料自給率が40%前後から向上していないにもかかわらず、コンビニエンスストアなどでは大方の食料品が入手可能で、世界トップクラスの長寿国です。消費者にとって、食料問題は近くて遠い存在のようにみえます。国内食料生産の持続性の点で、現在潮目にいるかもしれないことを、今後もアカデミアの立場から、伝えていければと思っています。

日本学術会議東北地区会議公開学術講演会

「東北地方の持続可能な食料生産のこれから～畜産業、水産業」講演を終えて
—特に水産業からの視点—

日本学術会議第二部会員

東北大学大学院農学研究科 教授

大越 和加

地球規模の環境変化により、温暖化をはじめ気候変動が顕在化し、また、自然災害が頻発かつ甚大化しています。今まで当たり前のように享受してきた自然の恵みが危うくなり、今日ではPlanetary Health、Nature Positive、Well-being の考え方があらゆる分野に浸透しつつあります。世界の人口は増加が続き、食料の需要が増え、食料危機をどのように乗り越えるかは喫緊の課題となっています。さらにパンデミックや紛争など、地球環境だけでなく国際社会も変化し、生態系の劣化と人間社会の問題が絡んだ複雑で困難な課題が増えています。そのような中で日本の食料自給率 38% という低さは深刻です。



大越和加先生

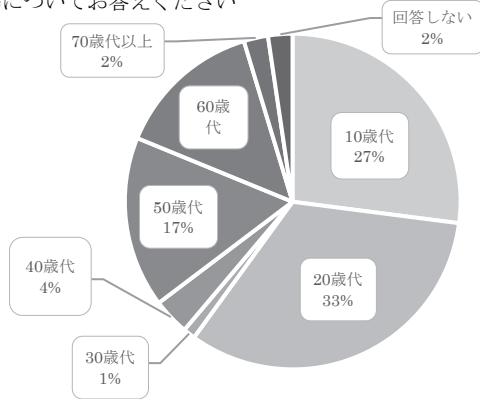
本シンポジウムでは、陸と海の動物性タンパク源を生産する畜産業と水産業に焦点を当て、それぞれの現状と持続可能な食料生産について課題が示され、東北地方で行われている研究や企業の取り組みの話題提供がありました。畜産業は、家畜化し食料として生産するまで人手による大きなエネルギーとコストがかかるため、技術や生産システムの最新・最適化を行いブランド化を図る一方、水産業は、基本は多くの資源が海の生態系に依存して育つため、その利点を生かした対策が紹介されました。

さて、自身が専門とする水産業の講演では、近年、日本近海、特に東北地方太平洋沿岸域では著しい水温上昇が観察され、冷水性の水産資源の漁獲量のみならず、養殖業の生産量も顕著に減少が続いていることを示しました。国内ではこれまでも漁業者の減少、高齢化、水産物需要の減退など多くの課題が山積していますが、そこに高水温というさらなるダメージが加わり、水産業はますます難しい状況に陥っています。今回のシンポジウムでは、磯焼けが解消し海藻が繁茂するとウニやアワビ類が増殖し、カーボンニュートラルにも貢献するという研究や、地元企業が自然の生態系を最大限に利用する持続可能な水産業に取り組む事例が紹介されました。講演後、若い世代から海洋や水産業の実態を知り驚いたという感想が届きましたが、海が生活から遠のいた今日、海洋環境や海洋生態系の特徴を理解し、それらが水産業や食料問題とどのように関わるのか、教育・普及が不十分であると感じました。水産業は、今日の地球的課題や取り組み（Nature Positive 等）と矛盾することなく成長、発展が可能であると思います。

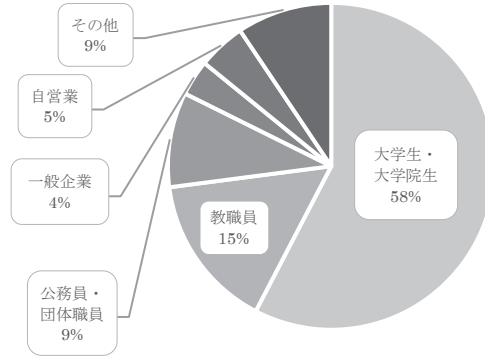
日本の食料安定供給を支える東北地方の畜産業、水産業は共通した課題があること、同時にそれらは世界共通の食料生産の課題解決を担う根幹となる産業であることを再認識しました。

公開学術講演会アンケート結果（抜粋）

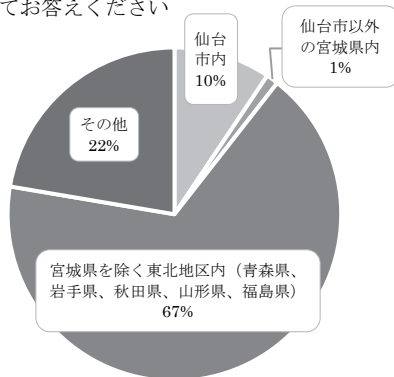
●年齢についてお答えください



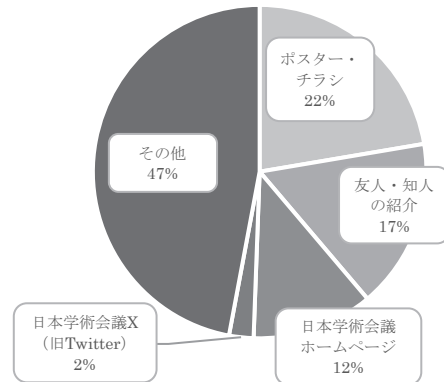
●ご職業についてお答えください



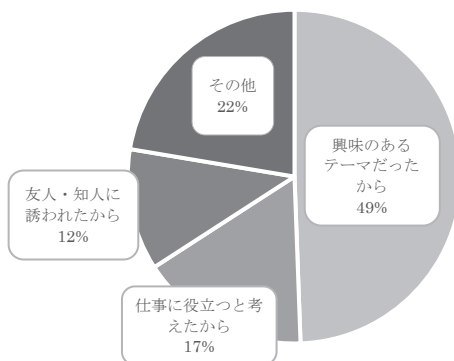
●お住まいについてお答えください



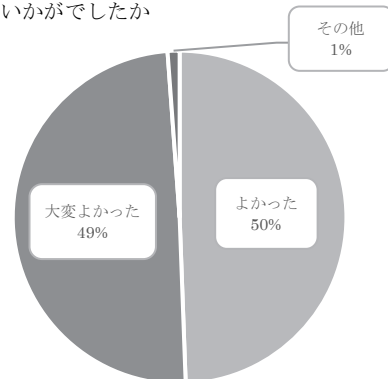
●講演会開催を知ったきっかけをお答えください



●参加動機をお答えください



●講演会の内容はいかがでしたか



講演会に寄せられた、ご意見・ご感想

- ・畜産業や水産業の現在について知るとてもいい機会になった。全体を通して AI を用いたスマート農業の話題が多く、これからの農業は、人ではなく機械が主体となって進めていくことになるのかもしれない、これまでとは少し違った視点で物事を考えていく必要があると感じた。
- ・とても興味深い内容で、未来の「食」について、より考えるきっかけになった。ありがとうございました。
- ・特に磯焼けの話は興味深かった。ニュースで聞いた程度の知識しかなかったがとてもわかりやすかった。畜産や漁業の分野で AI やロボットが活用されていることを初めて知った。
- ・生産者や研究・技術者などの様々な目線から食についてお話を聞くことができ、食への関心が高まった。食料生産が持続的に行われるために消費者である私たちができる食への理解を深めていきたいと思った。
- ・消費者の視点をというテーマで総合討論も含めて生消連携のコミュニケーションや食育の重要性が指摘されていましたが、もう少し具体的な実践論までブレイクダウンした議論があればよかった。

3 地区会議構成員（会員・連携会員）名簿

2025年3月現在

五十音順、敬称略

氏 名	所 属	分 野	氏 名	所 属	分 野
会 員			海老原 寛	東北大学	臨床医学
五十嵐 和彦	東北大学	基礎医学、基礎生物学	江村 克己	福島国際研究教育機構	電気電子工学、情報学
市川 温子	東北大学	物理学	大隅 典子	東北大学	基礎医学
大越 和加	東北大学	食料科学	大谷 栄治	東北大学	地球惑星科学
小田中 直樹	東北大学	史学、経済学	大野 英男	東北大学	総合工学、電気電子工学
北川 尚美	東北大学	化学、環境学	大林 茂	東北大学	機械工学、総合工学
木村 直子	山形大学 岩手大学	食料科学	大和田 祐二	東北大学 福島国際研究教育機構	基礎医学
下條 真司	青森大学 大阪大学	情報学	小川 智	岩手大学	化学
田中 真美	東北大学	機械工学	小野 裕一	東北大学	地球惑星科学
西川 正純	宮城大学	食料科学	小野田 泰明	東北大学	土木工学・建築学
芳賀 満	東北大学	史学、哲学	折茂 慎一	東北大学	材料工学
連 携 会 員			海妻 径子	岩手大学	社会学、史学
青木 洋子	東北大学	臨床医学、基礎医学	掛川 武	東北大学	地球惑星科学、環境学
赤池 孝章	東北大学	基礎医学	加藤 千尋	弘前大学	農学
秋葉 澄伯	弘前大学 鹿児島大学	健康・生活科学	加藤 秀実	東北大学	材料工学
阿尻 雅文	東北大学	化学、環境学	金沢 文緒	岩手大学	史学、哲学
足立 幸志	東北大学	機械工学	金田 千穂子	東北大学	総合工学、材料工学
安達 毅	秋田大学	総合工学	河合 宗司	東北大学	総合工学、機械工学
阿部 恒之	東北大学	心理学・教育学	河合 佳子	東北医科大学	基礎医学、基礎生物学
荒木 由布子	東北大学	数理科学	河岡 慎平	東北大学 京都大学	基礎医学、基礎生物学
飯島 淳子	慶應義塾大学	法学	菊地 芳朗	福島大学	史学
石井 直人	東北大学	基礎医学、臨床医学	木村 敏明	東北大学	哲学、地域研究
石川 拓司	東北大学	機械工学、総合工学	木村 恵	秋田県立大学	統合生物学、農学
石川 奈緒	岩手大学	土木工学・建築学	経塚 淳子	東北大学	農学、基礎生物学
今村 文彦	東北大学	土木工学・建築学	行場 次朗	東北大学	心理学・教育学
上野 義之	山形大学	臨床医学	久保野 恵美子	東北大学	法学
有働 恵子	東北大学	土木工学・建築学	倉永 英里奈	東北大学	基礎生物学
梅津 千恵子	東北公益文科大学	農学、環境学	栗原 和枝	東北大学	化学
梅津 理恵	東北大学	材料工学、物理学	厨川 常元	東北大学	機械工学
江草 宏	東北大学	歯学	黒柳 あずみ	東北大学	地球惑星科学

氏 名	所 属	分 野	氏 名	所 属	分 野
小泉 政利	東北大学	言語・文学	永次 史	東北大学	薬学、化学
河野 暢明	慶應義塾大学	基礎生物学、食料科学	中谷 友樹	東北大学	地域研究
小谷 元子	東北大学	数理科学	中山 啓子	東北大学	基礎医学
後藤 あや	福島県立医科大学	健康・生活科学、臨床医学	南後 恵理子	東北大学 理化学研究所	基礎生物学、化学
小林 隆	東北大学	言語・文学	南條 正巳	東北大学	農学
小林 広明	東北大学	情報学	西堀 麻衣子	東北大学	化学
小山 良太	福島大学	農学、地域研究	野家 啓一	東北大学	哲学
西條 芳文	東北大学	基礎医学、電気電子工学	野尻 浩之	東北大学	物理学
佐々木 郁子	東北学院大学	経営学	橋本 優子	福島県立医科大学	基礎医学
志田原 美保	東北大学	総合工学	長谷河 亜希子	弘前大学	法学
柴田 悦郎	東北大学	材料工学	長谷川 珠子	福島大学	法学
島田 義也	環境科学技術研究所	基礎医学	肥山 詠美子	東北大学	物理学
下野 裕之	岩手大学	農学	平野 愛弓	東北大学	総合工学
菅沼 拓夫	東北大学	情報学	平本 厚	東北大学	経済学
杉本 亜砂子	東北大学	基礎生物学	古原 忠	東北大学	材料工学
杉本 諭	東北大学	材料工学	本間 香貴	東北大学	農学
鈴木 匡子	東北大学	臨床医学	松八重 一代	東北大学	環境学、経済学
住井 英二郎	東北大学	情報学	三島 和夫	秋田大学	臨床医学
曾我 亨	弘前大学	地域研究	水野 紀子	白鷗大学	法学
高井 伸二	北里大学	農学、食料科学	宮本 ともみ	岩手大学	法学
高村 仁	東北大学	材料工学	武藤 由子	岩手大学	農学
竹石 恭知	福島県立医科大学	臨床医学	持田 灯	東北大学	土木工学・建築学
田村 裕和	東北大学	物理学	本橋 ほづみ	東北大学	基礎医学、基礎生物学
坪倉 正治	福島県立医科大学	臨床医学、健康・生活科学	谷田貝 亜紀代	弘前大学	地球惑星科学、環境学
寺田 眞浩	東北大学	化学	山下 正廣	東北大学	化学
寺田 幸弘	秋田大学	臨床医学	山下 まり	東北大学	農学
徳山 英利	東北大学	化学、薬学	山田 聡	東北大学	歯学
直江 清隆	東北大学	哲学	湯村 和子	東北医科薬科大学	臨床医学
中澤 俊輔	秋田大学	政治学	吉田 郵司	産業技術総合研究所	総合工学、電気電子工学

以上 116 名

